

日本研究所と周恩来氏

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政経資料センター 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 一之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10396

日本研究所と周恩来氏

池 田 一 之

中国・瀋陽市。東京駅をモデルにした赤レンガの旧奉天駅があり、15年戦争発端の現場・柳条湖があり、張作霖爆殺事件の現場も当時のままである。日本のジャーナリズム研究には避けて通れぬ地であり、今夏も中国2週間の旅のうち、ここに5日間滞在した。

この瀋陽市に1964年、中国で初めて日本研究所が開設された。創立当初の10年余は遼寧省の独立した研究機関であったが、いまは遼寧大学の研究機関に変身している。省の独立研究機関が一大学のそれになったのは、文革運動のためである。紅衛兵たちは、かつての侵略国・日本の研究を許さなかった。30余名いた研究者たちはすべて下放させられて、荒野で慣れぬ農作業を強いられ、研究所は閉鎖に追いこまれた。

日本研究所をこの地につくれ、と命じたのは周恩来氏であった。そしてその閉鎖を知って再開を命じたのも周恩来氏である。

現所長で、日本近・現代史が専門の易顯石氏も下放させられた一人であった。「71年初め、私は農村から戻り、再び研究をはじめたが、文革のなかで傷つき、挫折して戻ってこなかった同僚も大勢いました」という。まさに満身創痍の日本研究再開であった。

しかし、再開してからすでに17年が経過している。78年から82年にかけて天津、吉林、長春などの六つの大学に日本研究所が設けられ、他大学にも日本の政治・経済・日中関係史などを研究する人が増えて、毎年2回、日本研究学会が開かれるまでになった。季刊の紀要『日本研究』（遼寧大学日本研究所で出版）も刊行されている。それらの業績はわが国において

も近年次々と翻訳出版されており注目を集めている。

中国において第1号ともいべき日本研究所が北京でなく、なぜ遼寧省の省都・瀋陽となったのであろうか。今回も瀋陽までの中国民航機の塔乗券が買えず北京から特急列車に乗る羽目となった。北京駅を発車して最初の停車駅は天津である。周恩来氏にとって天津は少年期を過した南開中学校があり、「5・4運動」に若き情熱を燃やした、しかも鄧穎超・女史とめぐり会った思い出の地でもあったはずである。なのに天津を素通りして日本研究の基点を瀋陽に求めたのは、確乎不動の中日友好を望んでやまない周恩来氏の思いがこめられているような気がしてならない。両国の過去を徹底検証してこそ、初めて正しい日本研究が出来る。その場は東北地区が最適であると。

私のジャーナリズム研究の基点の一つも柳条湖であり、瀋陽を含めた中国・東北地区である。